

「ありがとう」

山田町立山田中学校 佐藤 明恵

ある人との出会い、そして震災が、私を成長させてくれた。

私には、大切な友達がいる。でも、その友達といつとも一緒に居ることは、出来ない。一年半前のあの震災で離ればなれになってしまったのだ。だけど、その友達は私が辛い時、いつともタイムミングよく電話をくれ、心だけ一緒にいてくれる。一番遠くて、一番近くにいてくれる存在だ。

2

二〇一一年三月十一日。まさかその日が一緒に居られる最後の日だとは思ってもいなかっただ。次の日に親が迎えに来て、引き取られていったのを最後に、私達は会えなくなってしまうた。震災後。連絡を取りあえるわけもなく、私は内陸に避難していた。二十日間以上の避難。その間に友達は、転校するという現実をどう受け止めたのだらう。一番辛い時に一緒に居てあげられなかった。その時の後

佐藤明恵

悔は、今も胸の奥で静かに私の心を痛めつけている。私に、転校したという情報が入ったのは、一学期始業式前の一回目の登校日。前の担任から聞いた時は、周りが真暗になつた。私が「それが現実なのか」とや」と理解できなかったのは、その帰り道。かすかに漂う潮の香り。泥だらけの道路。ひっくり返つたままの車。涙がとめどなく溢れた。何故なのか。何故、あの子が転校しなければならぬのか。そして、何故、あの時私は、辛いはずだった

あの子の隣にいてあげられなかったのか。自分を責める日々が続いた。しかし、それを一変してくれたのは、やはり友達だった。二回目の登校日に、他の友達を通して受け取った一枚のルーズリーフ。それは、友達によつて書かれた、転校を知らせるものだった。苦しかったような言葉は一つもなく、ただ明るく、そして「ごめんね」と書かれていた。辛くてもめげずに頑張る様子に、涙が溢れると共に、今までの自分を責め

る思いが流れていった。手紙を読み終わり、
 友達は友達なりに頑張っているんだ、私も笑
 顔で頑張らなきゃと思った。前を向く事が出
 来た。
 その友達とはそれから、電話をしたり、手
 紙交換をしたりして、離れていても連絡を取
 り合っている。同じ吹奏楽部に入っているの
 で、良きライバルとしても、お互いを高め合
 える存在だ。本当に素晴らしい友達をもった
 と思います。

私は震災を通して、
 つ周りの人を大切にする
 という事を改めて学んだ。震災前、私は友達
 に感謝の気持ち一つありがと〜と伝える事が
 出来なかつた。何を言っても、上手く相手し
 てくれた。注意をきちんと言ってくれた。そ
 して何より、私の友達としていてくれる。そ
 伝えきれないほど、たくさんありがと〜
 があるのに、何一つ伝えられなかつた。その
 後悔を二度としたくない。だから、普段から

周りの人への感謝の気持ちを持ち、接する事を
忘れないでいたい。

今の日本では、各地でいじめや自殺、人殺
しが繰り返されている。何故、相手をそして
自分を大切に出来ないのだろう。震災を通し
て、命の尊さと周りの人の悲しみを知ったは
ずなのに。もつと周りの人と自分を大切にし
てほしいと思う。

私は将来、小学校の先生になりたい。人間
関係の土台が作られる小学校という環境に立

ち、歪んでいない、真直ぐに相手を大切に
思う心を次世代の子供達に伝えていくのだ。

私の夢は、またまだ現実味が無く、諦めそう
になることもあるけれど、それでも自分の夢
に向かっ、一生懸命頑張りたい。

「相手を大切に思う心」
それは、相手に伝わっているように思えて、
伝わっていない事が多い。友達、恋人、家族
・地域の方とのお互いを思う心は本物なのか。
自分で、伝わっていると思いつつ、時々、相手を

傷付けてしまいうような言葉をかけていないか。この世の中、人間関係はもろく壊れてしまいう事が多い。その中で大切なのは、原点にある。相手をお大切に思うべしだと思ふ。「ありがとう」ごめんなさい。そんな言葉が、飛び交う関係が増えれば、その人間達だけでなく、日本中や世界中の人達が笑顔で仲良く暮らせると思ふし、そなた。てほしい。私のお大切な友達へ。

いつも、明るく笑顔で話しかけてくれてあ

りがとう。私も、同じ笑顔で話せているかな。君がいなくなつて、一時期本当に苦しんで、周りもやめていけなかつた。それでも、乗り越える事が出来たのは、やっぱり君のおかげかな。これからも、二人の進む道は違くても、お互いに頑張つていこうね。

最後に。

私の友達でいてくれてありがとう。